

アメリカに移住した日本人女性の 文化変容の語り

出 口 真 紀 子

1. はじめに

アカルチュレーション（文化変容）とは「異なる文化を持った集団が、継続的に直接的に接触し、その結果その双方あるいはいずれかの集団の独自の文化的パターンが変化するような結果を生ずる現象」（Redfield, Linton, & Herskovits, 1936）と定義される。集団ではなく、個人のレベルで変化が起きることを psychological acculturation（Berry, 1994）と言う。心理学では、アカルチュレーションの度合いを数値化するための尺度を開発してきた歴史があるが、これらの尺度は、主に言語能力、生活習慣の嗜好、エスニック・アイデンティティなどの要因で構成されている。しかし、これらの要因が移民自身にとって、実際に意味のあるものなのかどうかについての検証はされておらず、アカルチュレーションのプロセス自体について言及している研究が未だ少ないのが現状である。

米国における移民人口は今後も増える一方であり、文化変容のプロセスをより深く把握することで多様な移民コミュニティの問題点を把握し、介入・解決に結びつけることが重要である。文化変容は、移民たちの心身の健康、家庭や学校における適応、職業生活設計などに深く関わっていることが示唆されている。当研究では、米国に移住した一世代目の日本人移民自身がどのようにアカルチュレーションの体験を振り返り、移民たち自身がいかにしてアイデンティティを構築していくのかを、文化変容のプロセスを移民自身の視点から聞き取

ることによって探求した。

2. 方法

調査対象者

日本で生まれ育ち、20歳以降に来米し、最低25年間アメリカに在住している日本人女性を対象とした。参加者の募集には知人の紹介及び Snowball method (雪だるま形式) を用いた。米国ニューイングランド地域 (米国北東部、マサチューセッツ州、ロードアイランド州、コネチカット州など6州を含む) に在住している日本人女性10名が参加した。年齢は58歳～76歳 ($M=65.8$ 歳) で、渡米時の年齢は21歳～31歳 ($M=25.2$ 歳) であった。全員戦後に来米しており、1948年～1977年の間にアメリカに渡っている。在米年数は25年～55年 ($M=39.2$ 年)。婚姻関係については全員既婚者で、3名は夫が日本人、7名は夫がアメリカ人であった (うち白人5名、日系アメリカ人1名、アフリカ系アメリカ人1名)。当初アメリカに渡った理由は、アメリカ人との結婚 (4名)、夫 (日本人) のアメリカへの転勤 (2名)、海外留学 (2名)、日本を脱出したかった (2名) だった。社会階級においては殆どの女性がミドルクラスかアッパーミドルクラスに分類された。調査対象者の個人情報保護のため、氏名は全て偽名を用い、都市名・固有名詞などは代わりに「a Midwest city」、「a private school」などという風に表示した。

インタビューの過程

各参加者一人に対して2回のインタビューを行った (数週間の間隔あり)。インタビュー言語は日本語か英語で、本人の希望に従った。結果的には、10名のうち、二人が英語でのインタビューを希望した。インタビューの長さは1回につき、1～2時間程度。インタビューはすべて録音して、転記し、日本語でのインタビューは英訳した。インタビューでは、アメリカに行く前の日本での生活、アメリカに行ったきっかけ、アメリカに来てからの生活、について質問

した。なるべく参加者が語りにおいて主導権を握れるように、オープンエンデッド (open-ended) な質問を心がけた。

データ分析

質的調査法は量的調査法と異なり、仮説を立てるよりも仮説自体を生み出す。理解・描写・意味づけを探索しながら理論構築することを目的とし (Koppala & Suzuki, 1999)、社会的・心理的プロセスの解明に適した調査法である (Ponterotto & Grieger, 1999)。主題分析 (Thematic Analysis) はインタビューのテキストで繰り返し現れたテーマを拾い上げていく作業を繰り返し、テキストを系統的にコード化し、カテゴリーやテーマをどのように得られたかを明示するプロセスである (Boyatzis, 1998)。この分析法は複数の参加者に渡って共通のテーマを見出すのに役立つ分析法である (Riessman, 2003)。一方、ナラティブ分析 (Narrative Analysis) は、従来の質的分析法とは異なり、テキストを分断せず、語りの順序・構造を損なわない状態で分析を行う。特に長いナラティブがある場合、主な筋書きが容易に見えないことがあるが、ナラティブ分析はそのような時に大変有効である (Riessman, 1993)。当研究では、データ分析には主題分析及びナラティブ分析の2つを用いた。

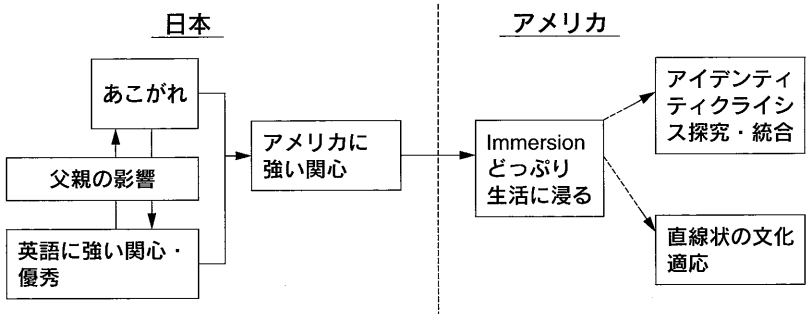
3. 結果

インタビューから導きだされた文化変容の語りを分析すると次の4つの語りのパターンが浮かび上がった：(1)「Becoming American (アメリカ人になりつつある)」、(2)「I Can Be Myself Here (ありのままの自分でいられる)」、(3)「Creating a Cultural Niche (文化的ニッチを創造した)」、(4)「I am a Guest (私はお客さん)」。以下、各パターンについて言及する。

(1) アメリカ人になりつつある (Becoming American)

(June さん、Yasuko さん)

図 1



「アメリカ人になりつつある (Becoming American)」という語りのパターンは、アメリカ文化に溶け込むことに強いモチベーションを持ち、アメリカ主流派の文化に溶け込むことに成功した女性たちが語った文化変容のパターンである。これらの女性たちは、幼い頃からアメリカ留学した父親の影響などから、アメリカに強い「あこがれ」や興味を持っており、英語力に卓越し、本人の溶け込もうという努力も合わさって、次第に日本人である自分とアメリカ人である自分が統合されていくという例である。

「憧れ」とは「理想とする物事に強く心が引かれること」(大辞泉)を意味し、アメリカという国に対するあこがれを抱く、という文脈で語りによく登場した。Juneさんの語りでは幼少時代、自宅の屋根裏部屋に保管されていた父親のアメリカ留学時代の写真を見たときの気持ちを語った。

父が写っている写真を見てますと、アメリカ人の方がみんな笑顔なんですよ。昔の日本では笑ってはいけなかったんですね、特に女性、女の子なんかは、歯を見せてはならなかった。憶えてらっしゃらないかも知れないけれど、こうやって笑うときは「おほほほ」と口を隠さなくてはならなかったのよ。ここに写っている人たちはみんな歯を見せて笑っている。私

は感動しましてね。「ああ、なんという素晴らしい国だろう。いつかこの国に行って、この幸せそうな人々に会いたい」と思ったの。彼らは本当に幸せそうに見えたの。だから、それがね、私がアメリカに行くのを夢見だした最初ね。父と同じようにアメリカに渡り、勉強がしたかった。

ヤスコさんの父親も東京の某美術大学で西洋美術を学び、西洋的な考え方に対して好意的な見方をしており、父親と美術を通して仲良くしていたという彼女はこうに語った。

その、アメリカに対する印象、その頃アメリカってよかったですよ、やっぱり。経済大国っていわれて、悪い、あの、しかも、戦争の後でしょ。だから、日本がサポートされている感じで。だから、私にとっては憧れの、良い国で、一度は足を踏み入れたいっていうか。

また、この二人は英語に対しても強い関心があり、英語力も抜きこんでいたことが伺える。ヤスコさんが英語について以下の通り語った。

昔から英語が好きだったんですね。小学校六年生の時にローマ字を習い始めてから、ローマ字にすごく懂れて、で、もう、すぐ覚えちゃったんですね。それで、ローマ字から英語に変わるのが待ちきれなくて、で、英語も大好きで。そんな感じでどうしてもアメリカへ来て、うん、英語の話せる国に住んでみたいなのが、やっぱり小さいころから、こう、懂れて持っていたのね。それで、まあ、それを大学卒業してから、実行したっていう感じです。

June さんもとにかく英語が得意で一生懸命勉強したと話した。

私は中学生のときに英語教育で有名だった私立の学校に入学しました。毎日英語の授業があり、そこで初めて本格的に英語を学びました。そこで私は自分の得意な分野を発見したのです。「これはすごい!」と思いました。そして長い間アメリカを訪れてみたいという夢とうまく合わさったのです。とにかく本当によく勉強しました。その後日本で一番英語教育で知られた大学に受かったのです。

一旦渡米すると、二人はアメリカ社会にどっぷりと浸る生活を送ることになる¹。たまたま二人はアメリカの中西部 (Midwest) に最初おり、その後東海岸に移った。アメリカに住み始めた二人はアメリカ社会に一刻も早く溶け込もうと一生懸命努力した。周りには日本人のコミュニティも知り合いもおらず、主に白人のコミュニティにできるだけ早く同化することを目標とした。しかし二人のプロセスの語りはここからは異なる。Juneさんは、一種のアイデンティティ・クライシスを迎える。アメリカ社会への同化が進み、「自分は理想的なアメリカン・ワイフになろう」と努力するが、子供が成長するに連れ、自分が子供たちに日本の文化を伝達していないことに気付き、伝達するためにはまず自分自身が日本のことを知らなければ、と日本の文化や社会についての文献を幅広く読み、日本人である部分のアイデンティティを模索し始めるようになった。次第に自分は日本人なのだろうか、アメリカ人なのだろうか、という疑問を感じるようになったが、それは加齢とともに徐々に融合され、最後は自分のアイデンティティが統合されたと実感する²。一方、ヤスコさんは、Juneさんのような文化的アイデンティティ・クライシスを迎えたという語りはなく、文化変容をゆるやかで規則的な上昇という形で体験している語りとなっている。そのため、彼女の文化変容のプロセスを「直線状の文化変容」(linear acculturation) と名付けた。長くアメリカに住むことで、少しづつ英語力が向上し、アメリカ文化の理解が深まり、徐々にアメリカ人の交友関係の輪が広がって、次第に日本とのつながりが薄れていく、といったプロセスだ。この二

人に共通しているのは、二人は英語を極めて流暢に喋れるようになったことから、主流（メインストリーム）のアメリカ社会に同化できるだけの言語的アクセスがあった点だ。

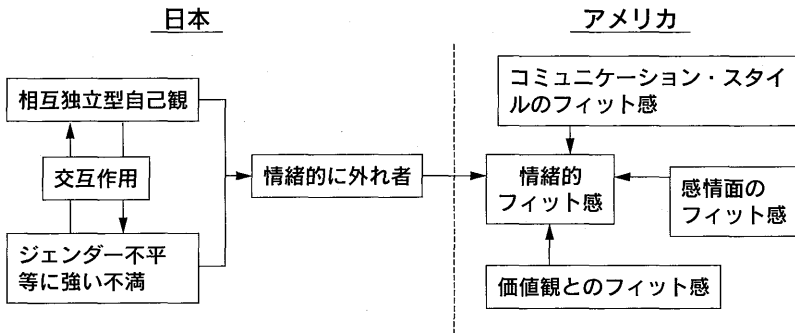
最後にこの二人について言えるのは、二人とも「文化変容」という概念を理解し、自分たちは確かに文化変容のプロセスを辿り、その結果、文化変容に成功した、と自覚している点である。ヤスコさんはアメリカ社会に100%順応した、と以下の通り語る。

日本人とそれほど接触しているわけでもないから、う〜ん。その辺では、やっぱり、アメリカには馴染んで、上手くいったと思います、自分では。全然抵抗ないですね。まあ、普通に日常生活には全然不便ないですねえ、はい。ハンドレッド・パーセント順応してるって言っても良いかもしれない。

(2) 「ありのままの自分でいられる」 (“I Can Be Myself Here”)

(ミチコさん、ハルミさん、レイコさん)

図2



「I Can Be Myself Here」(ありのままの自分でいられる)は、もともと日本の文化に馴染まず、アメリカ文化の方が自然に感じられたという語りのパターンである。最初の「アメリカ人になりつつある」女性たちに比べ、このパターンの女性は、楽しかった子供時代の思い出が登場しない。彼女たちは、非常に独立心が強く、日本社会のジェンダーにおける不平等に憤りを感じていることが多く、逆にアメリカ的価値観、コミュニケーション・スタイルなどが快適に感じられ、アメリカ社会にいる方が自分らしいと感じるタイプである。図2に示した通り、母国においては自分が異端児のように感じていたことが伺える。

図2にあるように、語りの中からは「相互独立型自己観」というテーマが浮かび上がったが、この概念はMarkus & Kitayama (1991) が提示したもので、人々は文化において歴史的に共有されている自己、すなわち文化的自己観を持っており、それを独立的な考え方(相互独立的自己観)と、相互協調的な考え方(相互協調的自己観)の2つに区分して考えることができる。相互協調的自己観(Interdependent self construal)は日本をはじめアジア国に多いとされており、集団の調和を保つために個人的なニーズを二の次にできたり、コミュニケーション・スタイルが間接的で相手の考えを察するような形をとったりする(Markus & Kitayama, 1991)。一方、アメリカ人をはじめとした欧米人の多くには相互独立型自己観(Independent self construal)を持つとされており、(1) 独立心とアサーティブネス、(2) 個人主義、(3) 思考と行動の一致、(4) 自分自身を優先する、などの特徴が挙げられる(Hardin, Leong, & Bhagwat, 2004)。

このグループの女性たちの語りでは、「自分の信条を第一に考える」「権威に対して立ち向かう」「思考と一致しない行動はとらない」、「個人主義的な性格」などという表現でコード化したが、これらはまさに相互独立型自己観の定義と重なることに気づいた。

この点で重要なのは、彼女たちは日本人であるにも関わらず、比較的強い相互独立型自己観を持っていた可能性が高いという点である。以下の語りの例を

紹介しよう。ミチコさんは私立小学校に通っていた時、先生に対して挑戦的な態度を取ったことが問題となった体験を語ってくれた。

例えばね、私が1年生だったときです。憶えてるんですけど、廊下を歩いてたんですね。これは私立の学校です。制服と帽子が壁にかかっているのですが、床に落ちてたんです。私が通りかかると、先生が「拾いなさい！」って言うんです。私は「なぜ私が？」と答え、拾わなかったのです。その後、母が学校に呼ばれました。

校内に落ちている制服や帽子を先生が生徒に拾うように注意するのは日本社会ならばごく当たり前の言動と思われる³。ミチコさんにしてみれば「私が落としたわけではないのに、何故私が拾わねばならないのか」という納得がいかない故の反抗だった。その結果、母親が学校に呼び出され、これが一度ではなく幾度となく起こり、協調性のない反抗的な子供というレッテルを貼られることになる。ミチコさんは成長するとともに「母親に恥をかかせてはならない」という理由から慎むようになるが、本質的に自分自身の考え方を変えたわけではなく、あくまで表面的に合わせる術を覚えただけである。つまり相互独立型自己観は変わらぬまま大人へと成長したことになる。

ハルミさんは、ミチコさんよりも23年遅くアメリカに渡ったが、彼女自身も日本になかなか馴染めなかったという子供時代の語りが目立った。以下の語りでは、自分が悪いと思っていないのに謝罪することを強要され、謝罪を拒否したエピソードが登場する。

最後は、結局先生に捕まって、ちゃんと仲直りさせられるわけですね。昔の小学校なんかは。その時も、先生にいつくら、「ちゃんと謝りなさい」って言われても、自分が納得していないから、謝れないんですよ。ごめんなさいが、絶対言えないわけ。もし、自分が本当に自分の方が悪いん

だって納得できたら、もう、土下座でも、出来ちゃったんだけども、全く出来なかったから、もう、どんなに、先生に言われても、謝れなくて、「なんで、あなたは、そんなに強情なの！」。

ハルミさんが断固として謝罪しなかったのは「自分は悪くない」という理由からである。このエピソードにおいて、彼女の「謝罪」の定義はアメリカ的な謝罪の定義と一致する。アメリカ社会では謝罪とは自分に非があると認めた場合にのみ行われる。日本社会では、謝罪の行為は非を認めているとは限らず、和解するためのステップと見なされ、調和を重視する社会にとって重要な円滑剤の枠割を果たしていると言えよう⁴。こうした理由から、彼女たちの語りを「相互独立型自己観」という表現でコード化した。

男女不平等に強い不満

このパターンの女性たちに共通していたのは、日本社会における男女不平等に憤りを感じていた点である。それは相互独立型自己観を持っていることと相互作用していたことが伺える。つまり、日本で相互独立型自己を持つ女性は多くの場合、自我や自己主張が強く「男性的」と見られがちである。ハルミさんは「もっと女らしくしなさい」と常に言われて育ち、社会の基準との葛藤や対立によって生じる息苦しさを常に背負っていた印象を持っている。日本における語りすべてがネガティブというわけではなかったが、「誰も自分を理解してくれない」という気持ちが根底に流れていた様子が伝わってきた。

ええとなんか、性格的に納得しないと動けない性格っていうんですか、男の子の性格、B型、B型です。やっぱり、小学校の時にやっぱりねえ、あの、男の先生、特にあの算数とか理科、私はちゃんと分からないと気が済まないから、色々質問するわけです。ですと、「女の子がそういう理屈っぽい質問をするもんじゃない」って、当時、私、怒られたことがあるんです。

当時日本には、やっぱりそういう女性としてね、尊敬して懂れるような先輩とか、身近な人が周りにいなかったんですよ。私には。その、自分の母親も含めて。で、女って凄く日本で損だ、つまらないっていう、そういう否定的な考えが、十八くらいからあったかな、もう。

しかし、アメリカに渡った時点で彼女たちの語りはポジティブなものに変わる⁵。価値観が合うことが強調され、例えばアメリカにおける「能力主義」に対して好意的だった。

あとね、この国は履歴書をチェックしないでしょ？どこの学校を卒業したとか。そうでしょ。ちゃんと周りがいい仕事をしていると認めてさえいれば学歴なんて関係ないのよ。そこが好きなんです、そこが。日本だと、どこどこを出てないと駄目とか、そう、そういうこと。

「アメリカに住む上でどんな点が良いですか」との質問に、ミチコさんは「ありのままの自分でいられる」と答えた。

一番いいのは、私がありのままでいられるということ。自分を偽らなくてもいい。で、何かを言いたければ、そのまま言えばいい。誰も傷つけずに、誰にも恥をかかせないで済むでしょう？

ハルミさんも同じような考えを言葉にした。

英語がそんなに出来たわけじゃなかったのに、その、初めて[ニューイングランド地域の都市]に来たときも、違和感が全然なかったんです。むしろ、その、なんか、自分の場所に来たみたい。う〜ん。日本にいる時のほうが、なんか、自分が外れているというか、ねえ、あの、異邦人という

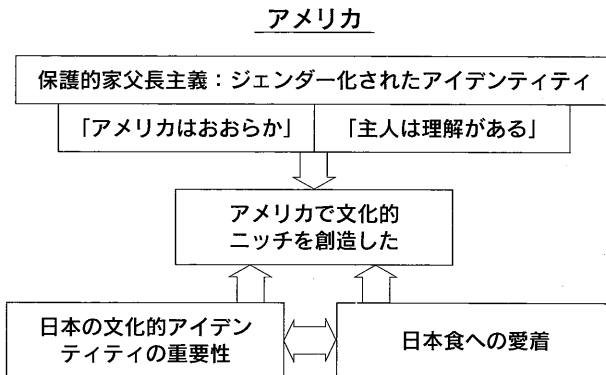
か、やっぱ、それは価値観のせいだと思いますけど。

彼女たちが「文化変容」という概念自体にさほどとらわれていないところも前者のグループと違った点である。アメリカでの成功を文化変容の尺度で測ることに意味を見出さず、あくまでも「自分は変わってない。環境が変わったせいで生きやすくなっただけだ」と主張する。前者のような「とにかくアメリカ社会へ早く順応したかった」といった語りではなく、自分が心地よくいられる国と出会って生きやすくなった、という語りだった。英語自体に対する関心も低く、英語はアメリカ社会で生活する上で必要な道具であるという見方をしていた。

(3) 文化的ニッチを創造した (Creating a Cultural Niche)

家父長制に甘んじたジェンダー化されたアイデンティティ
(ヨシコさん、クニコさん、タミコさん)

図3



「ニッチ」とは本人の才能や力量に適した活動範囲を見出し、自分の力量にふさわしい適所を得ることである。「Creating a Cultural Niche」は、日本文化が大切にされる環境の中で、日本人女性である「女性性」の特質を最大限生かしながら、その機会を楽しみ、日本にいたときよりも生活に意味を見出すパターンである。これらの女性たちは、アメリカは受け皿が広く「おおらか」であると感じ、日米の文化交流などの領域でリーダーシップ的役割を担っており、特に日本食文化に強いアイデンティティを見いだしている。

ヨシコさん、クニコさん、タミコさん、の三人は語りの中で前者のグループのような日本に馴染めなかったというネガティブな内容はなく、また英語に対して特に強い興味があったというわけでもない。むしろ彼女たちの文化変容の語りは日本文化とジェンダー（特に女らしさの概念）による影響を感じるものであった。アメリカに来て初めて自分が試される機会を与えられ、恐らく日本にいては出来なかったような形で自分の適所（ニッチ）を形成していった女性たちだ。彼女たちが手に入れたニッチとは、日本女性として身につけている日本文化的資源に対する知識とアクセスである。彼女たちは日本のお料理を作ることに長けていたり、茶道・華道という日本の伝統文化を身につけていたり、着物の着付けもできる、など、日本文化に造詣が深く、アメリカのニューイングランド地域の知識階級のコミュニティからは大変注目・重宝されるという結果となった。特に彼女たちがその地域へ移住した頃は日本人がまだまだ少なかった時代背景も手伝って、彼女たちは日米間の文化的な架け橋の役割を担い、活躍の場を与えられたのであった⁶。

図3にもあるように、彼女たちは自分の女性性を強く打ち出す形の語りとなっている。「家父長制」とは社会のあらゆる領域において、男性が女性を従属させているような社会形態と定義できるが、Glick & Fiske (1996) は、そうした社会における女性に対する差別意識を測定する尺度を作成した。この尺度は「敵意的セクシズム (hostile sexism)」と「好意的セクシズム (benevolent sexism)」の2つの下位尺度によって構成されている。「敵意的セクシズム」と

は、女性に対するステレオタイプのうち、嫌悪や強いネガティブな偏見が具体化されたものであり、例としては、「女性は些細なことで機嫌を損ねる」などがあげられる。一方、「好意的セクシズム」は、例えば「女性は男性から大切にされ、守られなければならない」といったような女性に対するステレオタイプの態度を持ちながら主観的にはポジティブな意味を持つ項目などで構成されている（田中&福富、2007）。Glickら（1996）によれば、「好意的セクシズム」的な態度の根底には保護的家父長主義（protective paternalism）、つまり女性は男性に守られ大切にされるべき存在だ、という意識が流れているという。

このグループの女性たちは誰もが、伝統的な性別役割分業を進んで受け入れ、日本女性らしさの象徴とされる伝統文化を自ら伝達する役割を担った。そのことから保護的家父長主義のもとで「女らしさ」を意識したジェンダー・アイデンティティとコード化した。彼女たちはインタビューで、アメリカという国が自分たちを受け入れてくれたおおらかな場所だと語っており、また、それに対して感謝の気持ちを表している。

（アメリカは）わたしをすっごく大きくしてくれた国かな、ええ。おおらかですね、アメリカは、の国って、人も。で、わたくしが、だから、いろんなことする場を与えてくれたところですよ、うん。日本にいたら、わたしこういうことしてなかったと思うんですよ。

（美術館関係の仕事に）お勤めしたり、日本協会の役員やったり、やってないと思いますよ、わからないけれど。そういう機会に恵まれることってあまりないですね、そういう場が、自分を大きくしてくれた、と思いますよ。

また、彼女たちの語りには「自分がやりたいようにやらせてくれる寛容な夫」

といったフレーズがよく登場した⁷。

まあ、主人もね、やりたいようにさせてくれたから良かったけど。わたくしがこういうふうに出てきても何も文句は言わないの。うーん |ねえ、あの時代の方で| そうそう、すごく、あのね、うんと協力してくれるの。

この女性たちとのインタビューで印象的だったのは、それぞれがインタビュー中に必ず「日本食」が登場したことだ。日本のお弁当箱を持ってきてお弁当を食べながらのインタビュー、日本食レストランでのインタビュー、ご自宅に呼ばれて日本食をご馳走になったインタビュー。彼女たちの日本食への強い愛着を感じた場面であった。

「アメリカに来て正解でしたか」という質問に対してヨシコさんはこう答えた。

正解。アメリカに来て良かったなあ、とほんと自分で思う。幸せだったなと、うん。やっぱり、日本にいたら、自分自身をいかせなかったと思うの。うん。まわりのいろんな、ね？そういうことね。それと女性がそういう、のびのびとあの一、本領を、まあ、わたくしなりに、あの学校の同窓会とかなんか、ああいうのを通して、そういうことをやったかもわかんないけど、やっぱり今みたいなことはね、やっぱりこの環境だからできたんで。

(4) 「私はお客さん」 (“I am a Guest”)

(エミコさん、カヨコさん)

図 4

アメリカ

アイデンティティを 構成するもの：	日本的な コミュニケーション・スタイル を好む
英語が特に好きでない 独立心がない アメリカ文化にどっぷり 浸かってない 男女平等思考じゃない キャリア志向じゃない	日本に住む友人 と強い絆を保つ ている

「I am a Guest」は、外からは高いレベルで文化変容しているように見えるが、本人は、アメリカ社会やアメリカ人に溶け込んでいるとは感じておらず、日本に強い愛着を持ち続けているパターンである。白人アメリカ人よりも日本人・アジア人などの友人が多く、日本語が自分を表現できる言語であり、重要なアイデンティティの一部と感じている。

エミコさんのインタビューで他の女性たちと異なった点は「私にインタビューしてもあなたの研究には役に立たないと思う」と最初に言われたことだった。「私なんかより、もっとアメリカ社会にどっぷり浸かった生活をしている女性がいるでしょう。私はお気楽な身分だもの。もっと職場で女性差別を経験してるとか、人種差別を経験してるとか、そういう人に話を聞いた方がもっといい話が聞ける」ということだった。

エミコさんの言葉の意味はインタビューが進むに連れ、明らかになった。彼女もれっきとしたアメリカ社会の一員であり、当研究の調査対象者としての基準を十分満たしている。なぜ彼女自身が自分はふさわしい調査対象者だと思わないのか。その答えは彼女の語りのパターンとして浮かび上がった。

前に紹介した3つのグループの場合、基本的にはポジティブな意味づけのされた語りだったと言えよう。アメリカや英語に対するあこがれ、価値観の一致、

活躍の場を与えられた等、すべてが一貫して肯定的な語りとなっていた。ところが、エミコさんやカヨコさんの語りはアメリカに來た必然性に対してはやや不明瞭だった。エミコさんの語りによると、彼女は「上記の3つの女性のタイプではない」という「負」のアイデンティティを構築している。

つまりエミコさんは、前記の「3つのグループではない」自分像を描いた語りだった。アメリカ文化にどっぷり浸っておらず、独立心が強いわけでも男女平等を唱えるタイプでもなく、また、英語も特別好きではない。家庭環境についての話の中で、エミコさんは一人で留学のため来米した女性だったため、独立心が旺盛なタイプに見られがちだが、それはあくまでも「自分はたまたま家庭の事情から英語を勉強をせざるを得なかったから」と言うような話をした。

英語をやるしかなかった

母は「奥さん」じゃなくて、ずっと大学で教えてたんだから、ちょっと違うのよね。そうね、だから、なんせ、女も、女も仕事持たなくちゃいけないっていう、手に職をつけてないとだめだってことを言ってたからさ。まあ、一番、そのなかに、家庭生活と両方、両立ちできるのは学校の先生でしょう？

だから英語の先生になんない、っていうことだったのよね。わたしは社会学や心理学に行きたかったんだけど、大学一年のときに、父が亡くなったから、もう、みんなで英語の先生しろ！ってことになったわけ [笑い]

そういうことで、しょうがない、まあ。やっぱりさあ、親が一人、父親が亡くなるとやっぱりさあ、{かかってきますよね。} そうでしょ？考え方がやっぱりちょっと違うわけね。だから、うん、個人の影響よね、それはね。だから、父が生きてたら、多分アメリカに來なかつただろうし、大抵（日本で）奥さんになってたと思うよ。

このようにエミコさんの語りは「色々な事情が重なって英語を勉強するしかなかった」と英語に対して否定的な語りとなっている。紹介はしないが、この先の語りでも、アメリカ留学の奨学金がもらえたのも「アメリカが経済的に豊か時代だったから」とその時の状況に起因したと説明した。同様に、自分は主婦になっていても構わない、つまり男女平等とかジェンダー不平等に対する不満もなく、キャリア志向でもないことを裏付ける語りが幾度も登場した。

言語、アイデンティティ、と情緒

エミコさんとカヨコさんにとって、日本語とアイデンティティは密接に結びついていた。また、日本人である、というアイデンティティは日本語及び日本への情緒的な感じ方とつながっている。例えば、エミコさんは年に二回は必ず日本に一時帰国をし、姉や母親を訪ねる。「だから、日本語それほどは忘れないでしょう?」と言った。その後、お互い知っている人の話題になり、その人は日本人のご主人とも英語で話しているそうで、エミコさんは「だから、わたしは違うもん、だから。そういった点でまだ、わたしはもう、あの、だから、あなたのおっしゃるアカルチュレーションじゃないけど、わたしは完全に日本人と思ってるからさ、英語はとってもできないからって」と自分は他の文化変容の進んでいる人とは違う、という点を強調した。

エミコさんは読み物も日本語と英語を両方読み、今も文芸春秋は定期購読している。同時に英語で書かれた *The Piano Tuner* (2003) という全米ベストセラーも夏休みには読んでいた。決して英語が苦手なわけでも読めないわけでもないが、本当の意味で理解するには日本語で書かれている方がいいと言う。

だから例えばさ、鑑賞して、味わえる、っていうのは、日本語。さっと読めんのは日本語。英語は全然だめ、そんなところもやっぱりすごい遅い、だって、もう入ってくる全然あれが違うもの。早さが全然違うから。だから日本語の方が早いね。だから、日本語だったらこう、「サマリー書いて

て」っていったらさ、日本語だとすっすってできるけどさ、英語だとさあ、ふうーって感じ。[笑い]

「ご自身のアイデンティティはどのようにお考えですか」という質問に対してエミコさんはこう答えた。

イエローだとかホワイトだとか？ [ええ] わたしは日本人。もうしょうがないけど、日本人。[笑い] だって、やっぱり英語が全然だめだもん。なんていうの、言いたいこと言えないの。

前記の「文化的ニッチを創造した」のグループに属しているヨシコさんやクニコさんはアメリカの老人ホームに入ると一番の不安要因はアメリカの食生活を強られることだった。ところが、エミコさんにとっては老人ホームに入って、もし痴呆で英語を最初に忘れてしまったら、どのようにコミュニケーションを取れるのか、という点が一番の不安要素だった。

だから、ほんと、あの英語は全然上手になんないし frustrated。それだけは frustrating。それで、なんか年とると、ボケちゃうと、英語は消えちゃうんですって？ 第二外国語って消えちゃうんだってさ。[ああ、そうですね。若い時の記憶の方があれ、強いんですってね。] だからさ、それ大変なのよ。わたし、だから、養老院でカリフォルニアには日本語がわかるところがあるそうだから、そういうとこにいかなくちゃいけないかなって。[笑い]

彼女たちが老後の不安を思う時、日本に対して最も強くアタッチメントのある要因（食事、言語）が浮き彫りになるのはごく自然のことに思える。

カヨコさんは、日本という国に対する愛着はやはり日本語を一番理解してい

るからだと言う。以下は私が「日本の国籍を手放すことに対する、何かありますか」と聞いたときの回答である。

不安、ですか、なんていうのか、寂しさって言うのか、う～ん。ありますねえ。あたしにとって、何と言っても、日本語が一番はっきり分かる言葉ですから。その、言葉を、言葉っていうのか。その国から、守られなくなるっていうのは不安ですねえ。{|じゃ、日本人であるっていうところの、あれは、言葉とか、そういう物ですか。|} 言葉、そうですね、言葉が一番多いかな。

「私はお客さん」のグループに属する女性は日本語及び日本的なコミュニケーションスタイルへの強い執着を示し、また、アメリカに在ることの必然性に対してはやや曖昧な部分を感じられた。カヨコさんのインタビューの最初の方で、カヨコさんは「まあ、四、五年はアメリカ生活も、楽しいだろう、と思って来たのが、どうしたことか、ねえ、こちらに、もう、三十年住むはめになってしまったもんですから、もう不思議なものですねえ。」と言っている。この「はめ」という言葉が正確な意味を持って使われたのかは別として、ポジティブな結果を意味するとは限らないニュアンスがある。

4. 考察

4つの語りのパターンを通じて見てきたのは、アメリカという国に対して日本人女性たちが好意的なイメージを持っていた点だ。戦後直後に渡った女性たちですら、敵国だった米国に対して肯定的だった。Kelsky (2001) は、戦前及び戦中において日本人男性と女性との間では、アメリカという国に対し、それぞれ独立したディスコースが構築されたと書いている。敗戦後、日本人男性はアイデンティティの喪失と屈辱を味わうが、日本人女性は、アメリカの占領軍による新しい憲法により、法的権利が大幅に改善されたことなどから、アメ

リカ軍の占領は一種の「解放 (Liberation)」と捉えた、という (Kelsky, 2001)。つまり、彼女たちの好意的なスタンスはジェンダー化されたディスコースによる部分は否めない。以下、4つの語りから学んだ点について言及する。

人—環境のフィット感 (Person-Environment Fit)

当研究では、日本人女性が4つの語りのパターンを通していかにアメリカ社会とフィット感を得たか (または得られなかったか) が示された。既存の文化変容に関する文献の多くは、移民の価値観・思考・態度などが移住先の文化とはそもそもフィットしないという前提で書かれている。つまり異なった価値観・思考などによって移民が異文化の狭間で苦勞・苦闘することが当然視されている。

Sue (2003) は「人が環境にどのようにマッチし、フィットするかは大変重要な点であるにもかかわらず、これまでの移民のメンタルヘルスに関する研究では、人と環境とのフィットについて言及されてこなかった」(p. xviii-xix) と心理学について苦言を呈している。しかし当研究では、さらにその人それぞれの異なる性格・価値観がどのように環境にフィットするかについて再検討する必要があることを示した。当研究では個人の性格・価値観と移民先の社会との一致が語りの一部のテーマだった。特に「自分らしくいられる」グループの女性たちは、価値観の一致を例に挙げている。ハルミさんも「初めて [ここ] に来たときも、違和感が全然なかったんです。むしろ、自分の場所に来たみたいな。日本に居る時のほうが、なんか、自分が外れているというか、異邦人というか。」また幼児期から、彼女たちは相互独立型自己観を持っており、自己主張をしたり、独立心が旺盛だった。また日本社会での、女性の性別役割分業を押しつけようとする風潮に対する憤りも感じていた。こうしたことが彼女をアメリカへ脱出する方向へと促したとも言える。ハルミさんは日本が好きになれず「日本を捨ててきた」という言い方もした。

Habu (2000) は1990年代にイギリスに留学した日本人女性への聞き取り調

査を行ったが、日本の慣習に従わなくてはならない息苦しさから自由になることを求めた女性の言葉が目立つ。Kelsky (2001) も若い日本人女性の西洋への「逃亡」現象は、彼女たちが日本で期待されるジェンダー役割に抵抗する最も重要な手段によると語る (p.2)。

今回女性たちがニューイングランド地方という比較的リベラルな地域 (特にボストンなどの大都市) に住んでいたことも考慮する必要がある。このインタビューの中で多くの女性は最初中西部に着地したが、何らかの形で東海岸に移動していることを考えると、やはり東洋人というマイノリティに対して寛容でリベラルな地域柄が重要な要素にもなっていることは否めない⁸。

移民前の文化変容 (Pre-Immigration Acculturation)

多くの日本とアメリカの文化の違いが認識されている中、成人してからアメリカに渡った日本人女性たちが文化的な違いで戸惑った内容の話をもっと語るものだと予想していたが、期待するほど文化差の話は出てこなかった。そこで、アメリカに移住する前の段階で既にある程度の文化変容が起きている点を考慮する必要があるように思われた。例えば June さんなどはかなり西洋的な価値観を持った両親に育てられ、民主的な原理に基づいた家族コミュニケーションをとっていた。June さんは「家族の間で何か問題があると父が『子供たち、家族会議の時間だ!』と言って家族全員を集めるわけです。それで『現在このような状況にある。では、どうすればいいと思うか』などと子供にそれぞれ意見を聞くわけです。勿論彼はどうするかは自分ではわかっていたけれど、それでも子供たちに自分の考えを主張する場を与えようとしていたのです。」と話した。June さんがアメリカ人と付き合い、結婚したいと両親に伝えた時も、両親は相手の年齢が若い点で心配はしたが、相手がアメリカ人だということで反対はしなかった。June さんによると母親は「西洋文学が大好きな文学少女」だったため、西洋的な個人主義に根差したロマンチック・ラブ・イデオロギーを内面化しており、娘の June さんには「自分の愛する気持ちに正直に

生きなさい」と応援した。その他、アメリカに対する強いあこがれや、英語を学んでいた点を考えると既に文化変容は始まっていると言えよう。Chun & Akutsu (2003) が、今後の研究は「移住前に起きたアカルチュレーション、つまり母国で習得したアメリカの慣習や行動に関する事前の知識と、移住後の適応度の関係を調べる必要がある」(p.112) と呈したように、今後アメリカに来る前の個人の歴史的背景・育った環境などに焦点を当てることがより有効と考えられる。

言語、アイデンティティと情緒の関係

当研究では、4つのグループが「英語」という言語に対してそれぞれ異なった「付き合い方」をしてきたことがわかった。「アメリカ人になりつつある」女性らは、英語に対して強い愛着があり、英語をマスターすることで文化適応を深いレベルで達成することができた。Juneさんはアメリカ人の男性と婚約していた頃(のち夫)、英文の手紙を義母に日本から送っていた。義母が亡くなった後、Juneさんの手元にその手紙が返された。それを読んだJuneさんは「読み返したらね、『私って当時でもなかなか良く英語書けてるじゃない!』と我ながら感心したわ {笑}」と語った。ヤスコさんも、アクセントを直すことに注意を払っていた。

しょっちゅう注意してましたね。だけど、自分で思うのは、まあ、訛りがない、ほとんどアクセントの無い英語を話したいというのが自分の目的だったんですね。だから、それをしょっちゅう心がけていました、自分で。だから、あの、時々人に言われると嬉しいですね。「You don't have any accent」とかっていわれると {笑} やっぱ、嬉しいです、ええ。

Juneさんとヤスコさんについて言えるのは、二人は10人の中では最も若い年齢(当時21歳)で来米しているため、発達の観点からも英語への受容性がある

たことも考えられる。

一方「ありのままの自分でいられる」女性たちにとっては、英語は実用的なツールでしかなく、コミュニケーションができればいい、という程度の関心しか示さなかった。私がインタビューでミチコさんに「アメリカに対して何か特にイメージしていたことはありましたか？例えば、英語がお好きでしたよね」と聞くと、彼女は「好きとか嫌いとかそういう問題ではない。私には子供が5人います。日本語を強要すると彼らは黙ってしまう。だから、私にとって重要なのは、子供とコミュニケーションをすることだった。だから、そのためには英語を学ばないと、と思った」と答えた。ハルミさんも英語の成績は良かったが、インタビューの中で英語に対して肯定的な語りはなかった。また、この二人は英語を上手に喋れるかどうか、アクセントがあるかどうか、などと言った心配はしておらず、アメリカ人の話す英語と自分の英語を比較する、という意識がないようにも感じた。文化変容のゴールに言語習得は含まれてないかのようだ。

「文化的ニッチを創造した」女性たちの語りの中でも英語に対する深い思い入れは感じられなかった。ヨシコさんは中学で英語を学んだが、「だけど、あんまり嫌いだったから、あんまり一生懸命にやらなかった」と言った。タミコさんも特に英語ができたわけではなく、クニコさんも自分の子供と英語で話すことにも抵抗は示さなかった。彼女は「普通のアメリカ人の生活に私が入っていく方法にいったわけ。だから、おうちで日本語を話すということはしてないの。だから、うちはみんな日本語じゃなくて、アメリカ語なの。おほほほ」と明るい。英語・日本語の言語自体には執着はないが、日本への執着は日本食を通して表れているのかも知れない。

「私はお客さん」の女性たちは、日本の言語・情緒に強い愛着があり、一方で英語に対するコンプレックスを一番はっきりと認めたグループである。高い英語力レベルの基準を内面化し、常に自分の英語力と比較をし、自己批判的な部分も多々あった。西洋文化にアカルチュレートすることが、自己批判的な精

神から自己肯定観の精神へ移行するのであれば、このグループの自己観はまだ日本人的な部分を多く残しているように思われた。また、自分が日本人であるということは、日本語を一番理解できている、という形で深く本人たちの日本人アイデンティティと関わっていた。

このように、女性たちが自分のアイデンティティを語る上で、英語という言葉の捉え方が何らかの形で影響していることが伺える。文化変容の尺度では「英語の読む力・書く力・聞き取る力」を自己評価する項目があるが、こうした、英語力を自己評価だけでは理解しえない、英語との「付き合い方」「関わり方」が大きく彼らの文化変容のプロセスに関わっていることがわかった。つまり、言語習得の動機付けを測るなど、より複雑化した尺度を開発することで今後さらに興味深い関連が見えてくると考えられる。

「母親との関係」と「母国に対する愛着」の関係

興味深いのは、「ありのままの自分でいられる」といったパターンが認められた女性3人は、日本という国との関係が疎遠になっているだけでなく、母親との関係が極めて希薄だったことが共通している点である。ミチコさんは母親との相性が悪くことごとく反抗をした子供時代を過ごし、ハルミさんの母親は継母で（18歳の時に事実を知らされた）強い絆がなかった。また、レイコさんには、彼女が子供の頃、母親が子供を残して家を出ていったしまったという過去があった。母親との絆が弱く、母親に対して心理的な親密さを感じていない彼女たちにとって、母国を脱出する、あるいは母国を捨てる、という行為は何か偶然ではないように思える。一方、母親との関係が強い女性たちは、日本に頻繁に帰国し、例えば老人ホームに入居した母親を定期的に見舞っているなどしていた。今後文化変容を考える上で、母親との関係について知ることは、本人の母国に対する愛着について調べる上で有効な要因と考えられる。

内省性 (Reflexivity)

内省性とは、「研究者が自身の調査過程に目を向け、自身の興味、立場、前提がどの程度研究に影響を与えたかを読者が評価できるようにする」ことである (シャーマズ、2008、p.201)。インタビューの聞き手であった私自身が参加者の女性からどのように見られていたかについて明らかにすることは、当研究を評価する上でも重要である。私自身が日本人女性であり、日本語・英語を話せることは、参加者から比較的容易に信頼されたと考えられる。インタビューもしばしば女性の自宅で行われることがあったため、自分は信頼されている立場であると自覚できた。社会階級においても参加者の女性たち (中流階級) とはそれほど大きく違わないように思えた。私自身がどう見られていたかだが、私に対しての対応は4つのグループによって大きく分かれた。「アメリカ人になりつつある」の女性は私及び研究テーマに対して肯定的で、応援してくれた。「書き上がったらずい読みたい」と言ってくれたのもこのグループの女性だった。恐らく彼女たちにとって私はバイリンガルであり、自分の若い頃を投影していたのではないと思われる。一方、「ありのままの自分でいられる」女性たちは、基本的に私に対する興味がなく、私への質問は殆どしてこなかった。「文化的ニッチを創造した」女性たちは私がシングル・子無しである、ということを知ると、やや批判的で、「勉強も大事だけれど家庭も大切よ」などとやんわり説教されることもしばしばあり、私が一番緊張したグループだった。最後の「私はお客さん」の女性たちは私自身がどういう位置づけの日本人であるかについての関心が高く、私に対する質問も一番多く、時には逆にインタビューされてしまうことがあった。彼女たちのインタビューでは私自身がどのタイプの日本人女性に当てはまるのか (独立心が旺盛なのか、男女平等主義者なのか、アメリカ社会にどっぷり浸かっているのか、など) を見極めたい、という動機が感じられた。

最後に当研究の限界について言及する。日本女性の文化変容に4つのパターンしかない、というのではない。あくまでニューイングランド地域に在住して

いる、ある時期にアメリカに渡った日本人女性の体験に基づいた観察である。また、サンプルが小さい上、女性は全員が既婚者で子供がおり、社会的階級も中・上流階級の女性が殆どであった。今後の研究に向けての課題としては、幅広い社会階層及び独身の女性の体験へと対象を広げたい。また日本人男性へのインタビューを行うことで、語りがいかにジェンダー化されているかをより明確に知ることができるであろう。最後に彼らの人種・文化的アイデンティティを探究することで、文化変容のプロセスとアイデンティティの関係を更に明確化する必要がある。

引証・参考文献

- Berry, J. W. (1994). Acculturative stress. In W. J. Lonner & R. S. Malpass (Eds). *Psychology and culture*. Needham Heights, MA: Allyn and Bacon.
- Boyatzis, R. E. (1998). *Transforming qualitative information: Thematic analysis and code development*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The ambivalent sexism inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of personality and social psychology*, 70 (3), 491-512.
- Habu, T. (2000). The irony of globalization: The experience of Japanese women in British higher education. *Higher Education*, 39, 43-66.
- Hardin, E.E., Leong, F. T. L., & Bhagwat, A.A. (2004). Factor structure of the self-construal scale revisited: Implications for the multidimensionality of self-construal. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 35 (3), 327-345.
- Kelsky, K. (2001). *Women on the verge: Japanese women, western dreams*. Durham, NC: Duke University Press.
- Kopala, M. & Suzuki, L. A. (1999). Preface. In M. Kopala & L. Suzuki (Eds.), *Using qualitative methods in psychology* (pp. ix-x). Thousands Oaks, CA: Sage Publications, Inc.
- Lewis, C.C. (1995). *Educating hearts and minds: Reflections on Japanese preschool and elementary education*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Markus, H. R, & Kitayama, S. (1991). Culture and self: implications for cognition, emotion and motivation. *Psychological Review*, 98 (2), 224-253.
- Lewis, C.C. (1995). *Educating hearts and minds: Reflections on Japanese preschool and*

- elementary education*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Ponterotto, J. G. & Grieger, I. (1999). Merging qualitative and quantitative perspectives in a research identity. In M. Kopala & L. Suzuki (Eds.), *Using qualitative methods in psychology* (pp. 49-62). Thousand Oaks, CA: Sage Publications, Inc.
- Redfield, R., Linton, R., & Herskovits, M.J. 1936 Memorandum for the study of acculturation. *American Anthropologist*, 38, 149-152.
- Riessman, C. K. (1993). *Narrative Analysis*. Qualitative Research Methods Series 30. Newbury Park, CA: Sage Publications, Inc.
- Sue, S. (2003). Foreword. In K.M. Chun, P. B. Organista, & G. Marin (Eds.). *Acculturation: Advances in Theory, Measurement, and Applied Research*. Washington D.C.: American Psychological Association.
- Suenaga, S. (1996). *Good-bye to sayonara: The reverse assimilation of Japanese war brides*. Unpublished doctoral dissertation, Boston College, MA.
- 田中有理・福富護 (2007) 男女平等の判断基準と個人領域の関連性の検討：新たな平等主義尺度の開発に対する一考察東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 58, 101-110.
- Tobin, J., Wu, D. Y., & Davidson, D. H., (1989). *Preschool in Three Cultures: Japan, China, and the United States*. New Haven: Yale University Press.
- Wagatsuma, H. & Rosett, A. (1986). The implications of apology: Law and culture in Japan and the United States. *Law and Society Review*, 20 (4), 461-498.

注

- 1 Juneさんは日本でアメリカ人と結婚し翌年来米。ヤスコさんはご両親を説得し、小さな中西部の大学に留学するために一人で渡米し、日系アメリカ人の男性と結婚してアメリカに残った。
- 2 Juneという名前はアメリカ人の夫が出会った当初つけたアメリカ風なニックネームだった。ところが、彼女はある時点から、自分の日本名を取り戻す作業を開始する。彼女のアイデンティティを模索する過程は大変興味深い但当論文ではここに焦点を当てない。
- 3 日本では校内・教室内の管理は生徒全体における責任であり、生徒各自で教室や校内をきれいに保つのは生徒の義務とする考えが浸透している (Lewis, 1995; Tobin, Wu, & Davidson, 1989)。
- 4 文化人類学者我妻洋とアメリカ人の法学者アーサー・ロゼットの意見ではアメリカでは、自主性を重視し、謝罪を自己主張と考えており、日本では共同体のヒエラルキと和合を重んじているという違いがあると説明した (Wagatsuma & Rosett, 1986)。

- 5 ハルミさん及びレイコさんは自分の意思で来米し、それぞれアメリカで結婚相手を見つけて結婚した。ミチコさんは夫の客員教授の仕事のため来米し、そのままアメリカに残った。
- 6 クニコさんは1959年に来米したが、当時を振り返った彼女は「入国した際の私のビザの番号はまだ4ケタだったから、それほど日本人が少なかったことだと思う」と話していた。ちなみに1959年にアメリカ国籍保持者の妻として入国を許可された日本人女性は4,412人だった (Suenaga, 1996)。
- 7 クニコさんとタミコさんは日米間の文化交流を促す団体に属し、ヨシコさんは日本人の駐在コミュニティにおいて婦人部を作ったりしてリーダーシップを発揮していた。
- 8 ミチコさんは最初中西部の大都市に夫の仕事の関係で住んだが、ニューイングランド地域に来てからは「中西部には二度と戻りたくないと思った」と話してくれた。「中西部の人はみんなフレンドリーだったけれど、人種同士は大っぴらに隔離されていた」と言う。

Summary

Acculturation Narratives of First Generation Japanese Migrant Women in the United States

DEGUCHI Makiko, Ph.D.

This study aims to develop a deeper understanding of the acculturation experiences of first generation Japanese American women. Ten Japanese women, ages 58 to 76, who reside in the New England area of the United States, were interviewed for the study. The women had entered the U.S. between 1948 and 1977, and had lived in the U.S. for an average of 39.2 years. Analysis of the interviews revealed four narrative patterns for relating their acculturation experience: (1) Becoming American; (2) "I Can Be Myself Here"; (3) Creating a Cultural Niche; and (4) "I am a Guest." The first pattern represents women who displayed a very positive valuation of the American culture, excelled in the English language, and successfully acculturated into mainstream American society. The second pattern represents women who reported feeling that they didn't "fit in" in their own culture (Japan) and felt "more at home" living in the U.S. The third pattern includes women who found a Japanese/Japanese American cultural niche in the community and were able to capitalize on their gendered Japanese cultural identities, which were valued highly by the community. The fourth pattern represents women who considered themselves to be "guests" in American society and continued to maintain an affective attachment to Japan.

The findings of the present study enrich the existing literature by demonstrating the importance of pre-emigration enculturation, person-environment fit, and the meaning of the host language, as shaping the

acculturation process, all of which have not received sufficient attention in psychological studies of cultural transitions.